

若者自立支援事業

「～あなたが今やりたいこと応援します！～」

- ◆期 日 平成21年4月～平成22年3月（随時受付）
- ◆会 場 国立能登青少年交流の家
- ◆対 象 青年（社会人、大学生 外）
- ◆参加者 29名（社会人14名、大学生15名）[2月28日現在]
- ◆講師 国立能登青少年交流の家企画指導専門職 外
- ◆主催 国立能登青少年交流の家
- ◆後援 穴水町、新潟・富山・石川・福井・滋賀各県教育委員会

1 趣 旨

- (1) 青年が、自分たちの興味・関心に沿った主体的な活動を行うための実践の場として、当交流の家の自然環境や施設・設備を提供し、自然・社会体験や集団遊び（レクリエーション活動）、世代間交流を通じて、知識や技能を高め、精神的・社会的自立を促進する。
- (2) 青年の精神的・社会的自立に向けての有効なプログラムを探る。

2 ねらい

- (1) 興味・関心に沿ったプログラムを企画し、実践することができる。
- (2) 企画したプログラムを実践することで、実践力を高め、また、新たな課題を見つけることで、問題解決能力を身に付けることができる。

3 日 程

- (1) 実施期間：平成21年4月～平成22年3月の主に土・日曜日
- (2) 内容と参加者

①内 容：畑作業 I

昨年3月下旬に植えたじゃがいもとトマトの追肥、土寄せ、草むしり等を行う。子どもたちと一緒に、収穫した野菜を使って、野外炊飯（カレーライス作り）を行いたいという思いから実施した。

- 参加者：4月18日（土）社会人2名
4月29日（土）社会人4名
5月10日（日）社会人2名
7月19日（日）学生2名



②内 容：畑作業Ⅱ

来年も、子どもたちと一緒に野菜を収穫して、野外炊飯を行いたいという思いから、畑をきれいに耕して整理し、腐葉土を入れて土作りを行った。

参加者：11月28日（土）学生2名・社会人2名



③内 容：子どもの体験活動支援

当所の利用団体である七尾市中島町のコミュニティスクールクラブの活動を支援する。子どもたちに、ディスクゴルフやアーチェリーの指導を行ったり、育てたじゃがいもを収穫してカレーライスを作ったりなど、子どもたちとの関わり方について学んだ。

参加者：6月27日（土）～28（日）学生6名・社会人2名



④内 容：野外炊飯を行う上での安全指導について

ダッチオーブン（パン）

野外炊飯では、火や刃物を扱うため、十分に注意しないとけがや事故に巻き込まれるおそれがある。そこで事例を取り上げて、演習形式で安全に野外炊飯を行うための方法や対策について考えた。

ダッチオーブンでは、パンの生地作りから、焼くまでの方法を学んだ。焼く際においては、強火にせず、弱火から中火くらいにしてゆっくり焼けば、おいしいパンができるということが分かった。

参加者：2月20日（土）～21（日）学生5名・社会人2名



4 成果と課題

(1) 事前・事後調査による事業分析

事業評価を目的とし、参加者を対象に調査を実施した。本事業は、実施時期・期間、対象人数、活動内容がそれぞれ異なるため、調査が可能であった事業のみ（③子どもの体験活動支援）調査を実施した。有効回答数は7名分で、これを用いて統計処理を行った。

調査項目は本事業の趣旨を踏まえて選んだ「生き方尺度」28項目を使用した。事業開始前を事前とし、事業終了後を事後として回答を依頼した。事前事後それぞれの平均値を算出し、t検定によって比較したものが、図と表である。

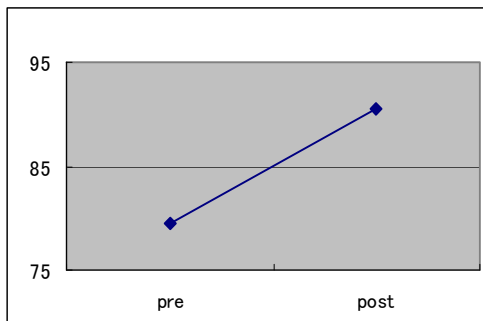


図1 事前事後における平均値の比較

平均値	事前 (pre)	79.4
	事後 (post)	90.4
t 値		5.67
t 確率		$p < 0.01$

表1 事前事後における平均値の比較

図と表が示しているように、事前と事後を比較すると平均値が大幅に上昇した。本事業を通じて、参加者に何らかの変容をもたらしたことが明らかとなった。では具体的に、参加者にどのような変容をもたらしたのかを領域別に分けて測定した。

【能動的実践的態度】

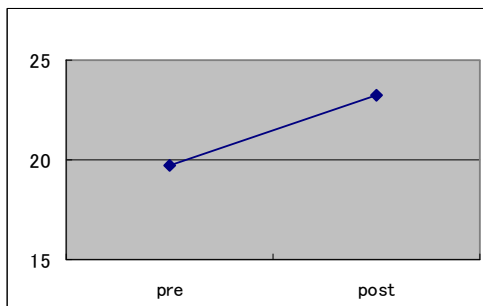


図2 事前事後における平均値の比較

平均値	事前 (pre)	19.7
	事後 (post)	23.3
t 値		4.97
t 確率		$p < 0.01$

表2 事前事後における平均値の比較

この因子は、7項目で構成されており、中でも「努力をおしまずに、自分のできることに向かって完全燃焼する」という項目の平均値がいちばん高かった。このことから、興味・関心に沿って青年自らが企画したことは、意欲的に実践できるということがうかがえる。

【自己の創造・開発】

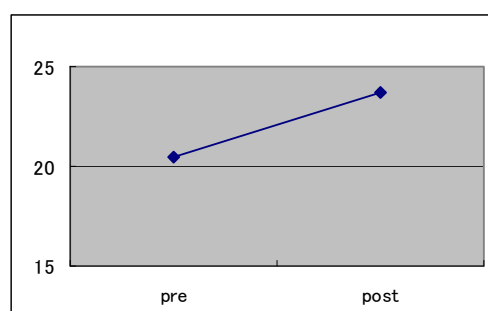


図3 事前事後における平均値の比較

平均値	事前 (pre)	20.4
	事後 (post)	23.7
t 値		3.80
t 確率		$p < 0.01$

表3 事前事後における平均値の比較

参加した青年に尋ねると、「実際に子どもたちとかかわってみることで、新たな課題を見つけることができた」や、「次は子どもたちとこんなことをしてみたい」という声が多く聞かれた。この因子の平均値向上だけに限らず、これらのことから、本事業のねらいである、問題解決能力が身に付いたと考えられる。

[参考文献]

板津裕己、生き方尺度、心理測定尺度集、サイエンス社、pp417-421

(2) 成 果

- ・自ら考えたプログラムを実践することで、意欲を持って取り組み、満足した事業であったという、アンケートの回答が多く見られた。
- ・「子どもの体験活動支援」においては、子どもたちへの問いかけや関わりなど、不安なことがあれば、適宜職員と相談し、事業中は、子どもたちと楽しく触れあうことができた。
- ・事業終了後、参加者同士の振り返りの場を設定することで、次の企画に向けての意欲へとつなげていくことができた。

(3) 課 題

- ・参加者は、目的意識が強い青年であり、「無気力・無関心」な青年の参加はなかった。むしろ、そのような青年は、このような事業について、何をどうすればよいのか分からないという状態である。そこでまずは、関係諸団体とのネットワークを深め、関係者の意向を踏まえながら、事業を展開していく必要がある。
- ・4月当初の大学におけるオリエンテーションをはじめ、当施設を利用した研修団体の青年にも積極的に広報を行ったものの、自らプログラムを企画して実践してみたいと申し込んでくる若者は少なかった。今後は、これまでの参加者の意見を聞いた上で、今の若者のニーズに合った事業の在り方について再検討することが求められる。